

至高の棋士

夜叉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

至高の棋士は約束を守るために、一人の幼女を弟子に迎える。

目次

| | | |
|-------|---------|---|
| プロローグ | 棋士との出会い | 1 |
| プロローグ | 名人と竜王 | 4 |

プロローグ 棋士との出会い

至高の棋士、久瀬くせ一名人。

当時、将棋界に激震が走った。19歳という若さで久瀬一は名人戦を勝ち抜き、名人へと至る偉業を成し遂げる。

戦法は後手番一手損角換わり、角換わりの一種だ。

将棋は従来先手が若干有利とされていたが日本将棋連盟公式棋戦においては微差ながら、統計開始以降はじめて後手の勝率が先手のそれを上回った。

角換わりの序盤において、後手が△8五歩を省略するために早期に角交換する。そのために後手の上にさらに一手損するという、従来は考え得なかった戦法である。

そんな彼は小学六年生にプロ棋士となり、中学を卒業後に高校には行かず将棋指しの現在を送っている。

黒髪のショートカットに切れ長の瞳が特徴的な美青年であり、小学五年生の時に両親を交通事故で亡くして以来というもの、両親もアマチュアでの将棋指しとして名を馳せていたために“形見”である将棋を大切にしてきた。

そうして足早と将棋界の階段を登った先に待っていたのは名人位だった。

「アンタなんて大嫌いっ!! おじいちゃまのバカーっ!!」

もう独りで将棋を指すのには限界が来ていたから、おじいちゃまに頼んでお父様が生前に約束をしていた九頭龍八一先生への弟子入りしようと思っていたのにお父様の事すら記憶に残っていない将棋指しに教えを乞うなんて絶対に嫌よ!!

「もう、誰もお父様のことなんか……覚えてない」

「僕は覚えてますよ、アマチュア名人だった夜叉神さんのことは」

縁側で煎餅をかじりながらお茶を呑んでくつろいでいる、この男は誰なの。

「だ、誰よ……あなた」

「九頭龍八一先生と同じく、昔に夜叉神さんと縁があった者ですよ。名前は久瀬一といいます。あっ、このお煎餅とお茶は晶さんから頂いたので勝手に盗んで食べ飲みしているわけではないですからね!!」

両手を広げてあわあわとしている様子を見て、不思議とつい先程までの八一先生へ感じていた怒りはどこかに飛んでいつてしまっていた。

どこか、お父様の雰囲気と似たようなものを持つてるように感じる。

「……それではあなたは何をしに来たわけ？」

「生前、夜叉神さんと約束をしていました。もし僕が棋士として名人になった時、天衣さんを弟子に迎えると」

「……っ!!? お父様が言っていたの、一人は若くして才がある者、いずれは頂点に立つ棋士。もう一人は若くして智を磨く者、いずれは至高に到達する棋士。九頭龍八一先生と久瀬一先生のことね」

おじいちゃまに将棋関連の本を買って貰って読んでいると度々、久瀬一先生の将棋の戦法が載っている。

私が指すであろう、お父様が遺してくれた将棋の戦法である後手番一手損角換わり、角換わりの一種。

「夜叉神さんがそのように言っていたとは嬉しく感じますね……願わくば生きてお会いしている時に言っていたくださいました。僕も幼い頃に両親を事故で亡くしてしまっしてね、悲しみに暮れながらも形見として将棋があつたので両親が遺してくれた将棋を守るために、証明するため今日まで将棋を指してきました」

言葉が出てこなかった。

目の前にいる、久瀬一という一人の棋士に私は自分自身の今を重ねてしまった。両親が遺してくれた将棋、それを誰の記憶にも残されずに消えていくのは嫌だ、家族との大切な思い出が消えていくのは嫌だ。

私は証明する、お父様が居たから、居てくれたから今の私があるんだと。大切な家族との大切な思い出を守るために、女流棋士になるの

よ、
絶対にね。

プロローグ 名人と竜王

言葉が出てこなかった。

目の前にいる、久瀬一という一人の棋士に私は自分自身の今を重ねてしまった。両親が遺してくれた将棋、それを誰の記憶にも残されずに消えていくのは嫌だ、家族との大切な思い出が消えていくのは嫌だ。私は証明する、お父様が居たから、居てくれたから今の私があるんだと。

「私は強くなりたい。竜王と呼ばれる人物より、名人と呼ばれる人物より、誰よりも強い女流棋士になりたいのよ……あなたに私を棋士として最後まで責任を持って面倒見ることは出来るのかしら」

生半可な気持ちで女流棋士を目指すつもりなんかない。私はまだ子供だけでも、覚悟はすでに出来ているつもりなんだから。

九頭龍先生との先の対局だって負けてしまったけれど無駄にはなっていない。敗北は次に活かすことが出来るチャンスになるんだから。

負けた悔しさとお父様のことを覚えてくれないなかつた哀しさで泣いちゃったけど。

「夜叉神さんとの約束を守るために、天衣さんを弟子に迎えさせてください。君を至高の棋士と呼ばれるに至るまで面倒を見ます」

「よ、よろしくお願ひします……」

黒の着物に身を包む彼は身体を精一杯に折って頭を下げ、その流れるような綺麗な動作に思わず私も頭を床に向かって下げていた。

お父様は一体、久瀬一先生とどのようなやり取りをして私を弟子に迎えるように約束をしたのか気になってしまいうじゃない。

「……ねえ、約束ってー」

「ー久瀬名人!!?」

廊下をドタバタと走ってきたであろう九頭龍先生の素っ頓狂な声で私の声は掻き消されてしまった。

「ん？ お久しぶりですね、竜王。竜王戦以来でしょうか」

「え、あ、はい!! 竜王戦以来です……って久瀬名人はこちらに何用で……」

実は、と口を開いた久瀬先生は九頭龍先生と私の顔を交互に見て何か納得したような表情を浮かべる。

「ちょうど僕の用は済んだところです。竜王、ここ最近の棋譜を見る機会があったのですが調子が悪そうでしたが大丈夫でしょうか」

「ええ……竜王としての立派な将棋を指せずに心苦しい限りで。連敗中です」

確か九頭龍先生は現在、公式戦で負け続きだったはず。正直、タイミング的にも負け続きで勝ちを模索する棋士の邪魔をするのも嫌だから弟子入りに関してはもう少し時期を見ようと思ってたのだけだ。

お父様の件、といい苦虫を噛み潰したような表情を見る限りでは相応なプレッシャーがかかっているみたいね。

「ふんっ。お父様のこと忘れるから、クス竜王……」

「な、なんだって!!」

「落ち着いてください、竜王。丁度良い機会なので非公式ではありませんが……僕と一局、指しませんか？ 棋譜を見た限りでは不調の原因を僕は分かっています。将棋を通してお伝え出来るかと思えますから」

棋譜を見た限りで不調の原因が分かる、というのは本当なのかしら。名人ともなれば他のプロ棋士とは一線を画す、のかもしれないけど。

相手は仮にも竜王であって現在では負け続きとはいえども史上最強とも言われる相手なんじゃないの。私だって4枚落ちで負けているのに久瀬先生は勝てるのかしら。

「こちらとしては願っても無いことです！ 是非ともお願いします！」

「負けてしまえばいいのに。あ、口が滑ってしまったわ。ごめんなさい」

久瀬先生が後手番一手損角換わりの戦法で勝負していくなら九頭

龍先生の居飛車は先手相がかり、後手一手損角換わり。お互いに泥臭い力戦調の将棋になるのは免れないはず、どちらが勝つのかしら。